

「物的流通」なる言葉の誕生時の事情

中 田 信 哉

一 はじめに

現在、一般に「物流」と呼ばれている言葉は「物的流通」を略したものだというのが通常の理解である。物的流通も物流も同じ意味だと理解され、「物流」が一般化しているが、「物流」と「物的流通」は併用されている。その言葉の誕生時には「物的流通」であった。現在では「物流」という方が通常であるが、ここでは「物的流通」で論を進めたい。

さて、「物的流通」という概念」の日本におけるその浸透・定着と「物的流通」という言葉」の誕生・定着は同時元で考えられているようである。それは多くの活動を統合化したシステムとしてみる物的流通の考え方が世に出て、定着していった時代と、それまで存在していなかった物的流通という言葉が世に認知されたのが同時代のことであり、同じような経過を経て陽の目を見ることになったと考えられているからであろう。

しかし、実際はそれは正しくない。なぜなら、物的流通という言葉はフィジカル・ディストリビューション (Physical Distribution) の訳語であり、例えば物的流通という言葉がわが国で仮に昭和三十九年 (一九六五年) にはじめて公

にされたとしても、この Physical Distribution という言葉は既に一九四〇年代にアメリカにおいて登場しており、ここでは概念が明確にされているわけであり、このことは初期より日本人の学者の間には知られていたからである。

実際には Physical Distribution の言葉及び概念の知識的レベルでのわが国への紹介はかなり早くから行われていた。しかし、問題は物的流通という言葉が世に認知されるのと物的流通の概念が社会的に理解され、受け入れられるのが同時ではなかったかというところであろう。確かに Physical Distribution の概念やその意味するものは一部の学者、有識者に受け入れられていた事実はあるし、Physical Distribution とは別に工学的・交通経済的なアプローチから、Physical Distribution の意味するものと同じような考え方をもち、それを主張する人々もいた。つまり、物的流通という言葉はなくとも、種々の別のいい方で、又は言葉でこの概念の発生はあったのである。

しかし、その的確な訳語、別のいい方をするような日本語がないことから、一般的にその概念が受け入れられたという状態にはなっていなかったのが実情であった。

そして、物的流通という言葉が使われるようになり、その言葉の意味するところが説明されることによって、はじめて物的流通というトータル概念が産業や行政の世界に入ってしまったのである。考えてみるとそれは当り前のことで、概念は概念であり、それを示す言葉、いいかえると共通認識を生む言葉がない限り、一般にその概念の内容を同一レベルにおいて、一般的了解という意味で理解してもらうことは不可能だといってよいであろう。

こういう考え方からするなら、物的流通という言葉の誕生とその一般的認知が物的流通概念の一般への普及を行つたといってよいであろう。かくして、単なるネーミングにすぎない物的流通という言葉の誕生はそれが物的流通概念の普及・定着をもたらしたといつてよいのかもしれない。

こういうことは当り前の話であろう。例えば、現在、ふつうに使われている「演説」という言葉は福沢諭吉が明治

七年に外国よりその考え方をもたらした時、Speech という言葉の邦訳として作ったものであり、この演説が日本語として使われることによって、演説という行為・制度はわが国に定着したわけである。そして、この Speech を苦勞して演説と邦訳した理由は福沢諭吉がこれをわが国に普及、定着させようと考えた意図があるわけである。⁽¹⁾もちろん、これが演説と訳されず、他の言葉であったとしても、同じ効果は得られたかもしれない。特に物的流通とか演説とかいう日本語が適切かどうかは別として、少なくともそれが日本語として誕生したことによって、その行為・制度も世に認知されたのである。

こうしたことから、今、物的流通概念のわが国への定着を考える時、物的流通という言葉の誕生時の事情を探ってみることはきわめて重要なことといわねばならない。

この小論においては、物的流通という言葉の誕生に焦点をあて、それに伴う物的流通概念のわが国への浸透について考えてみたい。

二 異なる認識

物的流通という言葉は実際にはそれがどういう形でわが国において生まれ、どう認知されたかは「はっきりしない」といわれているのがふつうである。

例えば鴻野豊氏は、次のように述べている。⁽²⁾

「わが国に物的流通の概念が導入されたのは昭和三十年初期であるが、このときは流通技術 (Distribution Techniques) と呼ばれていた (昭和三十三年二月刊、日本生産性本部『流通技術専門視察団報告書』) つまり、包装・荷役・輸送・保管などの技術面の向上に目が向けられていたのである。それが物的流通という名称におき替えられたのは昭和四十年

代前後のことであり、そのころから物的流通に管理の要素が加わってきた」

これがふつうの考え方のようになっている。これについて松下緑氏は以下のように述べているが、これがもつともそのあたりの事情を平易にくわしく述べていると思われる⁽³⁾。

「ところでこの言葉、(物的流通のこと——筆者注) 実は何でもないようにいって、このようにきまるまではなかなか難産だったのである。生まれた我が子の名前でも、凝りに凝ってああでもないこうでもないと思わずらい、悩み抜いたあげく『エーイ、面倒くさい。長男だから一郎にしておけ』と半ばヤケぎみに一件落着することがあるが、物的流通もまたそのネーミングにおいてこれに似た経過をたどっている。」

そして、そのことについて次のように述べている。

「Physical Distribution なる言葉をまっ先に日本に持ち込んだのは、日本生産性本部の派遣した『流通技術専門視察団』(団長・伊沢道雄氏、副団長・内田九万氏、ほか団員十名) で昭和三十一年十月下旬から十一月末までアメリカ各地を精力的に視察して帰国した。このときの報告書が昭和三十三年二月に日本生産性本部から “Productivity Report” の第三十三号として「流通技術」の書名で出版された。」

そして「この訪米視察により、従来両氏が唱導して来た “流通技術” という概念が Physical Distribution とほぼ軌を一にするものであると判断して、この頃より、フィジカル・ディストリビューションは流通技術という日本語に記されるようになったのである。」

更に「昭和三十年代も後半に入ると、識者の間でどうも流通技術という用語では意味が違ふというようにいわれるようになり、やがて元のフィジカル・ディストリビューションという原語に立ちかえり、さらにその略語として PD という言葉が、日本能率協会あたりでは使われるようになった。」

しかし、PDでは如何にも判りにくい。ごく一部の専門家にしか通用しない言葉である。その上、この概念は次第に重みを増し、政府筋でも、運輸省、経済企画庁、通産省、科学技術庁などでも流通にかかわりのある委員会が出来て、そのたびにあちこちでPDとか、フィジカル・ディストリビューションとは何であるか聞かれるたびに、説明する側でも一言で簡単に理解してもらえない日本語がないのか首をひねった模様である。

恐らく、この時点ではむしろ、専門家より関連学識者委員の方々と『PD、いいや、物理的な流通か、ピンとこないなあ』『なるほど、物質的な流通か、つまり、貨物の流通ということか』などと内心呟きながら対応していく過程の中で、次第に『物的』という表現にしばらくは留まっていたのではあるまいか。」

長々と紹介したが、今日現在、このような見方が物的流通という言葉の誕生においては一般的になっていると思われるからである。蛇足ながら、私もそうした考え方であった。

こうみると、物的流通という言葉は時代の要請の中から自然に湧き出るように作られ、定着していったということになる。誰がどういう経過でこの物的流通というネーミングを行ったというものでもないというわけである。

しかし、ここに一つの新聞記事がある。⁽⁴⁾その記事のタイトルは「二十年ぶりの対面、物流の訳語をめぐって、通産省・村岡局長と平原氏」というものである。この記事の中に次のような記述がみられる。

「実に二十年ぶりの対面であった。通産省の村岡蔵生貿易局長と平原直荷役研究所会長の初対面は昭和三十九年のことである。これが物流という言葉を生む契機となった。当時、村岡局長は企画局の商務課にいた。その頃、平原会長はPD論とパレット・プール論を展開し、経済審議会の委員を務めていた。若手担当官席にあった村岡局長がその席にいたのである。これを契機に村岡局長がPD及びパレット・プール化を予算化して本格的に取りあげることとし、翻訳の相談を受けた平原会長がPDを「物的流通」と適訳し、今日に至っている。」(傍点筆者)

これで見ると、平原直氏が物的流通という言葉を作ったことになる。この記事のなかで村岡氏は「平原さんの立派な翻訳が今日の物流になったんですよ」と述べている。平原氏は元日本通運に籍を置いた人であるし、現在でも（昭和五十九年現在）、物的流通研究の大御所として著名な人であるし、この話の舞台が通産省の政策作りの席である以上、松下氏がこのあたりの事情を知らないわけではない。

しかも、探してみると平原氏は同じ新聞に別の機会において次のようなコメントをのせているのである。⁽⁵⁾つまり、「村岡氏が通産省でPD及びパレット・プールを予算化して本格的に取り上げることになったが、PDでは言葉の通りが悪い。何か名案はないかと相談をうけ、『物的流通』という言葉はどうかと言った訳だ」と述べているのである。前の記事は村岡氏との対面に焦点がおかれているから、何となくそういうニュアンスになって、物的流通という言葉は平原氏の創造になったということなのかという決してそうではなさそうである。

この件に関して、大きな問題があると考えられる。事実、平原氏が述べていることに関して、昭和三十九年七月十九日の日本経済新聞では一面において次のようなタイトルの記事をのせている。⁽⁶⁾

「物的流通コスト削減。通産省、輸送・荷役などの合理化へ、まず、実態を調査、産業構造審議会に委員会を設ける」として、かなり大きくとりあげている。そして、日本経済新聞が正式に物的流通という言葉をとらあげたのはこれがはじめてということになり、以降、新聞ではふつうに使われるようになったという。

これで見ると、物的流通という言葉を作ったのは平原氏であり、どうも平原氏が単にアイデアをポンと出したレベルの話ではなく、平原氏が日本を代表する、早くからこうした問題にとりくんでいた著名人である以上、本来、このことはもっと高く評価され、物的流通という言葉の創造者として長く記録に残されていなければならないはずなのに、それが多くの学者の研究にとりあげられていないのはどうしてであろうか。同じ研究者が Physical Distribution

という言葉をはじめ使ったのはクラーク (Fred Clark) であるということはたいいの場合、言っているわけであるから、不思議な感じをもたされる。

例えば、市来清也氏は次のようにいう。⁽⁷⁾

「元来、わが国で使用されている物的流通ないし物流の語は、米国の Physical Distribution; P.D. から生まれたものである」とし、「わが国においては、物的流通を定義した公なものとして、統計審議会流通統計部会および産業構造審議会流通部会による発表などがある。(後略)」

また、谷本谷一氏は次のようにいう。⁽⁸⁾

「わが国において、物的流通または物流という言葉が聞かれるようになったのは昭和三十九年頃からであり、そう古くはないが、すでにアメリカにおいては、半世紀近く前の一九二四年に、マーケティング学者クラーク (Clark) が、この用語 Physical Distribution を使用している。」

ここであげた、二人の学者の説明は、それぞれの代表的な物流総論の著書においてであるため、ここでそれがとりあげられていないということはあえて、取り上げる必要がないとの判断にもとづくものと考えてよいであろう。

一体、それはどういったことなのであろうか。そこで、まず平原氏の研究の系譜について若干、ふれてみたい。

三 昭和三十年代までの研究

平原直氏は明治三十五年三月十四日に佐賀県に生まれ、九州大学法文学部経済学科卒後、国際通運(現・日本通運)に入社、昭和三十三年に退社後、荷役研究所を設立、研究を進めるかたわら「荷役と機械」誌を発刊、啓蒙につとめ、その間、産業構造審議会、中小企業近代化審議会などの各委員会委員を歴任し、山梨大学工学部、神奈川大学工学部、

流通経済大学などの講師をし、日本パレット協会の会長などにもなった。勲四等旭日章。⁽⁹⁾

平原氏は日本通運での経験を生かし、「荷役」の研究を昭和三十三年より自らの職業とされたわけであるが、平原氏は自らの研究が荷役から物的流通へ変遷していく過程について自らいくつかのポイントをあげている。

一つは平原氏が大きな影響を受けた資料であるが、それがウィルソン (C.I. Wilson) の論文である。⁽¹⁰⁾ これについて平原氏は次のようなコメントをつけている。

「昭和五年頃、私が二十八歳のころ愛読したウィルソン教授の本の一部ですが、この本で私は Coordination の概念と、流通時代 (Distribution Age) の到来近きを教えられ、これが私が荷役の研究から物流研究に進む基礎の一つとなっています。」

これは平原氏の若い頃の話であるが、その後の平原氏の研究にも、このコーディネーションの考え方は示されている。たとえば、経済企画庁の経済審議会企画部会の第一回流通小分科会(昭和三十九年三月二十三日)において、平原氏は次のような発言をしている。⁽¹¹⁾

「しかし、流通、つまり物財の流れをスムーズにするためには、個別企業における技術革新とともに関連企業の協力が必要となってくる。そのもっとも発展したタイプとしてはヨーロッパにおける International Pallet Pool System であろう。このような Coordination のためには、政府機関による指導が何よりも必要であろうと思われる。」
このコーディネーションの考え方に大きな影響を与えた人として、平原氏は何人かをあげているが、これらの人にもコーディネーションの考え方が強くあらわれている。

一人は伊沢道雄氏である。伊沢氏は明治二十一年に九州の島原に生まれ、一高、東大を経て鉄道省に入り、その後、満鉄理事となり、任期満了後、生鮮食料協会を設立し、ここを根城に日本の輸送・包装・食料流通近代化のために献

身された人であるが、伊沢氏の事務所が荷役研究所に引越してこられ、これによって伊沢氏の死までの十年間、平原氏は伊沢氏と机を並べ、一緒に仕事をし、その薫陶をうけたという。この伊沢氏のライフワークが、その後に物的流通となる流通技術であった。⁽¹²⁾次に内山九万氏があげられる。内山九万氏は日本通運の専務取締役を務められ、前述の日本生産省本部の「流通技術専門視察団」の副団長（団長は伊沢道雄氏）をされたが、もともと平原氏とは親交があり、荷役研究所の面倒を見ておられた。内山九万氏は昭和三十四年発行の「荷役運搬の基礎理論と応用」の中で「経営の近代化と流通技術」ということについて発表しておられる。⁽¹³⁾

そして、もう一人が東条民二氏である。東条民二氏は、やはり、前掲の「荷役運搬の基礎理論と応用」において、「運搬改善とインテグレーション・コントロール」という発表を行い、前述のコーディネーションと同義のインテグレーション・コントロールについて述べている。

このように荷役や運搬又は輸送からくるコーディネーション又はインテグレーションなどについて、平原氏は次のようにも述べている。⁽¹⁴⁾

「今日の物的流通の思想概念（Concept）に進展するキッカケとなったのは、一九五〇年ごろから胎動をはじめた Integration Approach to Packaging and Materials Handling の手法の発展ではないかと思う。これはやがて、今日のシステム化につながる手法であり、思想である。Coordination と Integration の考え方は米国の交通界には古くから唱えられていたが、MH（Materials Handling のこと——筆者注）に名称も変え、実質も飛躍してしまった。これは一九五八年五月紐育で開かれた、AMA（America Marketing Association のこと——筆者注）の全国包装会議で討議され、決定的な段階に達した。それまで Materials Handling Society という名称を使っていた米国運搬管理協会が International Materials Management Society に名称変更をしたのもその一つである。

そのころ日本でも、荷役運搬は曲り角にきている、という論議が盛んに行われ、しだいに運送、倉庫、包装などと結びつけて考える意識が芽生えはじめていた。やがて米国の *Coordination* と *Integration* 思想に開眼させられ、統合化手法が地につきはじめたことも物的流通思想導入の誘い水あるいは下地になったといってもよいのではなからうか。当時、私は *MH* の *Integration Control* をしきりに唱導しておられた故東条民二氏に私の荷役研究所創立十周年記念講演会（昭和三十四年六月）に『運搬改善とインテグレーション・コントロール』と題して講演をしてもらった。これが日本で *Integration Control* のはじまりではなかったかと思う。」

更に「わが国の *Physical Distribution* という言葉を、最初にアメリカから持ち帰り紹介されたのは伊沢道雄氏、またこれを主として唱導されたのは内山九万氏であった。」と述べている。

このあたりの平原氏の認識には若干、問題もある。事実、物的流通という概念の誕生へのアプローチには平原氏のいう荷役運搬的な方向からのもの他に、当時、急速に盛り上っていた流通変革をベースとする商業学、マーケティング的な方向があり、この中で物的流通誕生への萌芽がみられるのである。また *Physical Distribution* という言葉は日本生産性本部の視察団以前より多くの商業学者が国内の著作、論文において紹介している。

ともあれ、この三氏の思想は工学的なものであるが、その後の平原氏の理解は多分に商業学的性格を帯びてきており、平原氏は *Physical Distribution* という言葉の使いはじめをクラークだと認識し、昭和三十六年、日本能率協会で流通技術委員会が作られ、参加された時には田島義博氏（現・学習院大学教授）などと一緒になり、ここで林周二氏（現東京大学教授）、田島義博氏などの流通革命論の影響をうけたとしている。

そして、昭和三十九年に前記の経済企画庁の経済審議会小分科会で六月に平原氏がレポートをすることになり、「我が国における *PD* の現状・問題点と方策について」として報告をされているが、その中で、*PD* の概念として「*Physical*

Distribution とは、生産時点から消費または利用地点までの間における、物財の移動及び取扱いの管理をいう」として、クラークの著作を使って説明している。⁽¹⁵⁾

このあたりの平原氏のPDへの理解はきわめてクラークの影響が強くみられるのである。

以上、平原氏の物的流通研究の系譜をながめてきたが、平原氏の活動は中心が「荷役研究所」にあり、日本通運、国鉄などの関係、そして、経済企画庁、通産省、中小企業庁、団体としては日本生産性本部、日本能率協会等といった舞台が整うのである。⁽¹⁶⁾

そして、平原氏の物的流通への視点も荷役、運搬といった活動から、工学的コーディネーションへ、更には商業学的流通へと進んでいくのである。

当然、こうした研究は平原氏だけでなく、多くの人々によってなされ、いつてみれば、世の中の一つの流れとして流通技術—PD—物的流通といった方向が出てきたといつてよいだろう。

四 流通技術専門視察団から経済審議会へ

こうした背景の中で登場するのが昭和三十一年の日本生産性本部の米国視察団である。このチームについて、自らも団員の一人であった宇野政雄氏（現・早稲田大学教授）は次のように述べている。⁽¹⁷⁾

「振りかえってみますと、たしか日本生産性本部ができたのが昭和三十年でしようか。生産の生産性ということが最初とりあげられ、やがて生産と消費を結ぶ流通の生産性ということが問題となって、アメリカに、流通の視察団を出しました。昭和三十一年の秋に伊沢道雄さんが団長、内山さん（当時、日本通運専務）が副団長、それに国鉄の岡さん（当時、工作局長）という幅広いチームに、私もメンバーに加わり出かけたわけです。そのときに、視察団

の名前をどうするかということで、生産から消費への流れを見た場合に、今日の言葉でいえば商取引に関連する商流の面ではなく、物の流れに関連する問題をとりあげていくということで、調べた結果、言葉が二つあったわけです。

それは、ディストリビューション・テクニクスという言葉と、フィジカル・ディストリビューション。その視察団はディストリビューション・テクニクスという言葉がいいということになり、流通技術専門視察団（ディストリビューション・テクニクス・スタディ・チーム）という名前で渡米しました。（中略）帰国後、政府や産業界に、こういう流通技術というものを検討する必要があるのだというような提言をした。その辺が今日という物流、あるいは物的流通という考え方が日本へ入ってきたはじめだと思います。」

この報告書は昭和三十三年に財団法人・日本生産性本部より Productivity Report「流通技術専門視察団報告書」として発表されている。そして、この報告書においては、流通技術はディストリビューション・テクニクスではなくフィジカル・ディストリビューションであるとしている。⁽¹⁸⁾多分、それはこの報告書の第一章の「生産性向上と流通技術」を担当したのが宇野政雄氏であり、宇野氏はマーケティング・商業学の専門家であるため、ハンセン (H.L. Hansen) やコンバース (P.D. Converse) などのマーケティング学者の説を元に述べたためと思われる。事実、先にあげた日本物流管理協議会主催の座談会でも宇野政雄氏はアメリカの事情についてコンバース教授に話をきいた⁽¹⁹⁾ということを述べている。

しかし、この段階ではまだ流通技術はフィジカル・ディストリビューションであるという域までであって、その後、的確な訳語がないままPDとかフィジカル・ディストリビューションで通されていたと考えてよいだろう。

さて、それではこのPDやフィジカル・ディストリビューションがいつ、物的流通となったかである。平原氏は経済

審議会を経て、通産省の施策展開において「そうなった」と述べていることについては前述した。平原氏は次のようにいっている。⁽²⁰⁾

「（経済企画庁の）流通分科会で、私は老人だということでトップに報告をすることになった。私は一夜づけで『我国におけるPDの現状・問題点と方策について』という小論文を作った。これが企画庁で印刷されたので、私はこれをもとに六月九日の委員会で報告した。各委員からPDについていろいろな質問や意見が出たが、その時の議事録をみてみると、平原委員の発言として、PDの邦訳として、慣習的に『流通技術』を当てていたこともあるが、不相当だと思うので、さらに当分科会で検討してみたいと述べたことが記録されている。」

「昭和三十九年六月、私は通産省でPD及びパレット・プール論を開陳して間もなく、通産省の村岡さんから通産省ではいよいよPD及びパレット・プールを予算化して本格的にとりあげることになった。については近く新聞記者会見でこれを発表することになったが、PDではどうもまずい、日本人には通りが悪い、Physical Distributionの日本語の適訳という、どういえばよいだろうか、という相談をうけた。

サア、これには私もホトホト困った。私自身これまで述べてきたように、この用語については悩み抜いてきたが、これという名案が出ないので困っていたところである。『Physical』というのは物理的ということであり、Distributionは流通であるから、直訳すると、「物理的流通」ということになります。しかし、これでは余りややこしくて、産業用語としては不適当でしょう。最近、これを短かくして物的流通と表現する人もボツボツ出はじめています。どうしても漢字で表現するとなれば「物的流通」のほかないでしょう。』その頃、経済同友会のある人が物的流通という言葉を使っていたのを想い出しながら、私はこう答えたのを覚えている。

それから間もない昭和三十九年七月十九日の全国新聞の第一面に、通産省がその産業政策の大きな柱の一つとして「物的流通」政策をとり上げることになったと大きな活字で報道された。私は久しぶりにコミ上げてくるよろこびを禁じ得なかった。このときの新聞を十部ぐらい買いこんで、今日もなお後生大事にもっている。

Physical Distribution のことばがアメリカから持ち込まれてから、「流通技術」といわれたり、「PD」といわれたり、流動的な名称で落ちつかなかったものが、これでどうにか「物的流通」におちついたようである。

昭和四十年一月二十二日の経済審議会答申『中期経済計画』第七章の(3)流通の項には「物的流通」ということばで、その近代化が述べられ「PD」は明らかに「物的流通」に変身している。また、同年の運送白書にも「物的流通の近代化」という副題がつけられていたと覚えている。さらに佐藤内閣になって、池田内閣の中期経済計画に多少佐藤色を出すために、再び経済審議会に流通分科会が設けられ、私も再びその委員を命ぜられて会議に参加したが、そのときは頭から「物的流通」が単独項目としてとりあげられ、「社会経済発展計画」の名で発表された新経済計画の中には、第二章経済の効率化、(4)の(二)に「物的流通」として、一層、大きくとりあげられている。もはや、こうなると「物的流通」は決定的である。』

このあたりの経過については誰しもあまり異存はないようである。したがって、通産省を中心とした政策面からの物的流通という言葉の導入には平原氏がかかわっていたことははっきりする。しかし、この中で平原氏は物的流通の言葉は自らの作だとはいわず「一部の人がいていた」とか「経済同友会で……」といういい方をしている。ということは既に一部で物的流通という言葉はそれ以前にできていたことになる。

平原氏は別のところでは「そして、いよいよ通産省でそれを取り上げる、予算要求するとなるなら、新聞発表しなければならぬ。それで村岡さんが私のところへ来まして、フィジカル・ディストリビューションとかPDでは国民

にわかりませんというわけだ。だから、どう訳したらいいですかというわけです。訳の仕方は、内山九万氏からきいておったんです。フィジカルというのは物質じゃないんだ、物理的というんだと。(中略)ここで全国の新聞がPDを物的流通と発表したんですよ。だから、私は、決して名づけ親ではないかもしれないけれど、これで物的流通が固まったんですよ。⁽²¹⁾」

つまり、物的流通というのは決して、平原氏の造語ではないというわけである。政府の委員をやっていて、その段階で物的流通という言葉を定着させるのに一役買った平原氏の功績は少しもあせるものではないが、これ以前に物的流通という言葉は生まれているのである。

つまり、既に一部の研究者達の中ででき上っていた言葉を平原氏が代表して、政府の施策の中に持ち込んだというべきであろう。

五 日本通運における物的流通

実は、私はこうした話題になる時、よく日本通運の人から、「日本通運では昭和三十年代半ばから物的流通という言葉をししば使っていた」という話をきいていた。日本通運内を探せば「その資料はあるはずだ」というのである。そこで、このあたりを少し探してみたい。

まず、野村宏氏(日通総合研究所)は次のように述べている。⁽²²⁾

「日本において『物的流通』という用語が始めて使われたのは、一九六四年(昭和三十九年)、当時の日通総合研究所長であった金谷璋が、同研究所の機関紙『輸送展望』(六月号)に『物的流通の新しい傾向』という論文を発表したのに始まると言われている。続いて、同年七月十九日の『日本経済新聞』に『物的流通コスト削減』のために、

通産省が産業構造審議会流通部会の中に『物的流通委員会』を設置するという記事が載せられている。」

この後の記述について、野村氏は平原氏の論文を利用しているので、前述した事情を知りつつ、はじめて物的流通が使われたのは金谷氏の論文においてだとしているのであろう。「輸送展望」の六月号といえ、出版はそれより一カ月位は早いだろうし、そのための原稿作成はやはり一〜二カ月前だろう。金谷氏がそれに先だって構想をねっていたとしたら、少くとも昭和三十八年頃から日本通運及び日通総合研究所では物的流通という言葉が使われていたことをうかがわせる話である。⁽²³⁾

これについて、前出の松下緑氏は次のようなことを言っている。⁽²⁴⁾

「ここに『日本の輸送革新』という上下二巻の、当時としては画期的な『交通未来』について、日通総合研究所が世に問うた記念すべきレポートがある。発行が昭和三十九年二月一日。その下巻の三三一ページには『物的流通を合理化する』、『物理的な流通分野も……』という文字がみえる。このレポートの原稿執筆は半年前の昭和三十八年秋頃であるから、その頃はすでにPDという言葉が廃れていて、代替的な日本語があちこちで検討されていたのであろう。

昭和三十九年に入ると早々から『物的流通』という言葉は日通総合研究所の内部でも漸く使われはじめてきた模様で、現に当時の金谷璋所長は同月十六日の日通東京荷主会設立総会において『物的流通の新しい傾向』と題して講演を行っている。この講演は月刊誌『輸送展望』の同年六月号第二十五号に同じタイトルで再録されているので、われわれは今日その全容をたしかめることができる。恐らく、これがわが国における『物的流通』という言葉の最初の一般的使用であり、活字に印刷された嚆矢ではあるまいか。

通説としては、この言葉は日本経済新聞の昭和三十九年七月十九日（日曜）朝刊の第一面に出た『物的流通コス

ト削減（中略）産業構造審議会に委員会設ける』という見出しによってはじめて公式に使用されたということになっているが、これはむしろ、熟柿がまさに枝を離れる段階に及んで、ジャーナリズムがこれを認知したと理解すべきであろう。」

これで野村論文という金谷氏の輸送展望の論文が講演の再録であるということがわかるし、限定的といいつつ、既に昭和三十九年初頭に物的流通という言葉が活字になっていることをうかがわせる。

このように日本通運及び日通総会研究所の段階でかなり公式に昭和三十八年頃から使われていたということがいえ、平原氏は日本通運及び日通総会研究所と無関係な人ではないし、この当時、こうした分野の研究はきわめて狭い範囲の人によるものであった以上、平原氏として、これらの印刷物に目を通していないはずがない。しかし、平原氏があえて、それを特定化し、記録していないところを見ると、既に狭い範囲の研究者の間では物的流通という言葉はふつうに使われていたのではないかと思えるのである。

そして、経済企画庁や通産省、中小企業庁といった行政との関係が平原氏という個人で結ばれていたため、行政畑の人はそういう言葉の存在を知っておらず、平原氏の助言によって、それを採用し、それが日本経済新聞にとりあげられたと理解すべきである。

したがって、昭和三十八年頃に一部の研究者の間で自然発生的に物的流通という言葉ができあがったと見るべきであろう。ただ、こうした研究分野には国鉄、運輸省、一部の交通経済学者が参加していたはずであるし、商業学、マーケティング分野の研究もあったはずであるし、両者の交流もあったはずである。しかし、今のところ、これらの分野での記録はみつからない。日通総会研究所が唯一、こうした記録も不完全ながら残しているといえる。

ところが、探していたら、もう一つ興味深い論文がみつかった。それは中西睦氏（元早稲田大学教授）のものである。

中西氏は次のようにいう。⁽²⁵⁾

「平原直がフィジカル・ディストリビューションは『物的流通』というべきであると述べたことによって、物的流通または物流という語が定着したが……」と認識しつつ、「一九六〇年（昭和三十五年）、日本能率協会は『流通技術研究会』を開催し、流通経済研究所で林周二（東京大学・統計学）、田島義博（学習院大学・マーケティング論）、西睦（早稲田大学・交通論）などによる大学研究者を中心とする『物流研究会』が開催され、民間企業に物流が浸透しはじめると同時に、学術研究も本格的に開始された。」

どうもはつきりしないが、これで見ると昭和三十五年に「物流研究会」なるものが作られたようにきこえる。もし、昭和三十五年という意味で中西氏が書いているとしたら、それは中西氏の記憶ちがいであるといえるだろう。なぜなら、昭和三十五年当時、流通経済研究所はまだ存在していないからである。流通経済研究所は昭和三十八年に設立されたものである。設立者の田島義博氏は昭和三十五年当時は、まだ日本能率協会の「市場と企業」の編集を担当しており、その後、流通革命論を林周二氏らとともに展開して、有名な「流通革命」を林周二氏が中央公論社から上梓したのが昭和三十七年であり、その流通革命論（林氏の著作という意味でなく）によって、流通経済研究所ができたといえるのである。

そして、この研究会は確かに流通経済研究所において行われていたが、それは昭和三十八年以降のことであり、それも任意の勉強会として有志によって行われていたものである。私はこの件に関して、流通経済研究所に対して確認をしてみたが、残念ながら任意の勉強会のため、記録が残されておらず、その会の正式の名称も判らない。ただ、当時の関係者によるとただの「勉強会」とか「流通研究会」といったように呼ばれていたらしい。それに、この研究会は流通革命がもたらしているため物的流通に関しての専門のものではないとのことである。とにかく、物的流通と

いう言葉がこの研究会で使われていたという証拠はみられない。

したがって、昭和三十八年以前に物的流通という言葉が存在したということは確認できなかった。多分、探しても明確に印刷物となったものは存在しないだろう。

以上、述べてきたように物的流通という言葉は、昭和三十八年頃に、それ以前、流通技術とかPDとかいわれる概念を研究していた人や運輸関係者の間で生まれたものといってよいだろう。そして、それを正式に受容し、認知させるにおいて平原直氏の大きな力があつたといえるのだろう。当然、それは平原氏一人の功績ではない。

六 おわりに

昭和三十八年、三十九年あたりから二十年がたった。既に現在の物流研究者の大多数はこのあたりの事情にはまったく関係していないか（例えば、私は昭和三十八年にはまだ大学生であり、当然、世の中にそういう動きがあつたということについてはまったく認識していない）または関係していてもまだ若く、中心的人物ではなく、くわしい事情も承知していないのである（例えば、松下緑、野村宏氏は日通総合研究所の若手研究者であつたはずである）。

そして、当時の諸々の事情をくわしく資料で集め、まとめておくという作業をする人もいない。唯一、平原直氏が当時の資料を残し、整理しておられるが、それは氏自らを中心としたものであり、やや他の分野のものが欠けているように見受けられる。

そのため、多くの研究者は伝聞で、このあたりのことを簡単に理解するに止まっております、通説という形で簡単に理解するのみである。私としては物流研究の第二世代（？）の者として、今、ここに不備ながら、直接、当時のこうしたことに参加していない第三者として、整理をしておこうと考えるものである。

そもそも、物的流通という言葉は日本語としてはなほだ未成熟であり、どこもない。角本良平氏（交通評論家・早稲田大学客員教授）は物的流通という概念の理解が人によって異なるということを指摘し、「ところが『物流』については、まだこのような概念の定着がない。その一つの原因が訳語としてのあいまいさである。いっそのこと『マーケティング』と同じようにカタカナにしておけば、今日の政策の取り上げ方も違っていったと思う。」と述べており、冒頭にあげた松下氏の言葉の誕生の推測とあわせて考えると、誰かが政策的意図をもって、その効果まで考慮して作りあげたものではないということが考えられるのである。

物的流通という言葉はいかにも、生煮えである。かくして、日本物流学会（宇野政雄会長）では昭和五十八年の総会において、今後は物的流通といわず「物流」に統一するということを決議している。ついでながら、私も昭和四十七年以来、自らの論文・著作においては全て物流とし、物的流通という言葉は使っていない。

そして、現在では古い人はともかく、若手の研究者や企業の担当者は「物流」という言葉は使っても、「物的流通」とはいわなくなってきた。

何分古い話であり、公に残されている資料が少いため、欠けるところも多いと思われるが、この小論に対して新しい資料の提示による何らかの教示が多くの人から与えられるならば、それで補足し、よりくわしく当時の事情を整理することができらるであらう。それを願うし、それを行うのが、昔からの蓄積の上で研究を楽に行っている我々の役割だと思う。

なお、平原直氏、松下緑氏には私の力では探せない資料の提供を受けたことを記し、感謝したい。

- (1) 明治七年の話であり、このことは「福翁自伝」に述べられている。福沢の荏田平五郎宛の手紙ではスピーチュと言っていたことが高橋誠一郎『随筆・慶応義塾』(統)(慶応通信)に出ている。
- (2) 鴻野豊『物流常識用語入門』交通日本社、昭和四十六年
- (3) 松下緑「物的流通―その言葉の由来」『船舶振興』一九七三・七月号
- (4) 「日本流通新聞」昭和五十九年七月十三日
- (5) 「日本流通新聞」昭和五十八年九月三十日
- (6) 「日本経済新聞」昭和三十九年七月十九日朝刊
- (7) 市来清也『物流経営論』ぎょうせい、昭和五十五年
- (8) 谷本谷一『現代日本の物流問題』新評論、一九八〇年
- (9) 「日本流通新聞」昭和五十八年九月三十日「物流人と三十分」より
- (10) G. Lloyd Wilson Ph.D., *Coordinated Motor-Rail-Steamship Transportation*, D. Appleton and Company, 1930.
- (11) 経済審議会第一回流通分科会(於 商工中金会議室・昭和三十九年五月二十六日)の議事録より。
- (12) 平原直「日本物流の発達・伊沢道雄先生の壮絶な死」『荷役と機械』一九八四年四月
- (13) 荷役研究所『荷役運搬の基礎理論と応用』昭和三十四年
- (14) 平原直「物的流通、言葉の由来と系譜Ⅰ」日本物的流通協会『会報』昭和四十六年二月
- (15) Fred Clark, *Principles of Marketing* 1942, United States Armed Forces Institute.
なお、クラークがこの言葉を使いはじめたのはこの四版からのはずである。
- (16) 不思議なことに現在の物流では中心的存在となるはずの運輸省がこのあたりの話には出てこない。運輸者は物的流通という概念・言葉に関しての取組みにおいて遅れており、昭和四十年代に入ってから動きはじめたと考えられる。
- (17) 座談会「物流のあゆみと展望」日本物流管理協議会『物流十年のあゆみ』昭和五十五年
- (18) ディストリビューション・テクニクスを物流技術と訳したのが視察前であったが、帰国後の報告においては流通技術はフィジカル・ディストリビューションであるとなっている。概念が先行し、それに言葉を適合させている状態がうかがえる。
- (19) 宇野政雄氏はハンセンについては、その『Marketing』の翻訳を行っているし、視察時にはコンパースに主としてフィジカル・ディストリビューションのことをきいているのである。
- (20) 平原直「物的流通・言葉の由来と系譜Ⅲ・Ⅳ」日本物的流通協会『会報』昭和四十六年四月・五月
- (21) 前掲の「物流十年のあゆみ」における座談会

- (22) 野村宏「物流研究の動向」『交通学研究』一九八二研究年報
- (23) 日通総合研究所は日本通運の系列会社であり、人事の交流はあるし、現在は日通ビルのなかに置かれている。
- (24) 前掲の松下緑「物的流通―その言葉の由来」
- (25) 中西睦「物流意識の誕生とその変遷による物流行政の変化」日本物流管理協議会『物流十年のあゆみ』
- (26) 角本良平「物流という名の袋小路」『輸送展望』一九八一・冬号